

劉曉波に関する四書

——ノーベル平和賞受賞を祝す

朝 浩之

一九八九年の六四天安門事件のあと、日本でも政治改革・民主化を主導した中国知識人の著作が何点か翻訳出版されたが、劉曉波の『現代中国知識人批判』（徳間書店）に私は大いに注目した。「不思議なのは、『文革』が終わると、『四人組』とその仲間を除いて、全中国のあらゆる人が受難者と反『文革』の英雄になったことだ」という劉の物言いに強く共感を覚えたからだ。加害者はもちろん、たとえ被害者であっても文革の当事者であつたことは否定すべくもないのに、生き残つた被害者たちの多くは加害者を断罪するばかりで当事者としての内省的思考に踏み込む者は少なかった。そうした文革批判の「嵐」に強い違和感をもつていた私は、時代に対しどのように責任を負うかという自問から始まる彼の知識人

批判には強く引きつけられるものがあつた。その劉に、二〇〇七年三月、北京の万聖書園内の喫茶室で会う機会に恵まれた。日本から訪問した四人と書園の劉蘇里社長、総勢六人による歓談に私が蚊帳の外にあつたのは中国語力の問題であるが、天安門事件時の劉のイメージを追うばかりで、事件後もなお事あるごとに発言しつづけ、やがて〇八憲章へと至る劉の真意に迫ろうとしなかったことに未だに忸怩たる思いをもったままにいる。ノーベル平和賞受賞という「事件」を受けて、遅きに失した感はあるが、天安門事件をめぐる劉の行動の背後にある彼の思想とはどのようなものなのかを探りたく、四書をひもといてみた。

まず刊行順に簡単に紹介したい。『天安門事件から「08憲章」へ』は唯一ノ

(1) 劉曉波著／横澤泰夫・及川淳子・劉燕子・蔣海波訳／子安宣邦序／劉燕子編

天安門事件から「08憲章」へ

——民主化のための闘いと希望

四六判 三二〇頁

藤原書店「三、七八〇円」

(2) 劉曉波著／廖天琪・劉霞編／丸川哲

史・鈴木将久・及川淳子訳

最後の審判を生き延びて

——劉曉波文集

四六判 四三〇頁

岩波書店「三、三六〇円」

(3) 矢吹晋・加藤哲郎・及川淳子著

劉曉波と中国民主化のゆくえ

四六判 三六〇頁

花伝社「二、三二〇円」

(4) 劉曉波ほか著

「私には敵はいない」の思想

——中国民主化闘争二十余年

四六判 四〇〇頁

藤原書店「三、七八〇円」

ベル平和賞受賞前に刊行されたものであり、08憲章を帰着点に据えて天安門事件以降の劉の論考を時代を追って収めている。六四を迎えることに発表された八篇の詩と文が訳出されていることが際立つが、これからは「中国共産党が政権を掌握して以来五〇年の歴史において、人権にかかわる凄惨で大規模な災禍がしばしば起こり、……殺害された無辜の中国人は数千万に上る。しかし『天安門の母たち』のほかには、不断に発展するグループを作り上げ、根気強く戦い続けている受難者の家族のグループは一つもない」と自ら語るように、六四受難者の家族グループ「天安門の母たち」が劉に強い影響を与えたことが印象づけられる。それはグループの中心メンバーである丁子霖・蒋培坤夫妻による『天安門の母たち』と劉曉波（4）収載）によっても劉と彼らがいかに深い絆で結ばれているかをうかがうことができる。『現代中国知識人批判』における論調は知識人として自己完結する傾向があったように思うが、『希望は『民間』にあり』と劉が繰り返

すように至るには彼らとの交流によるところも大きかったのではないかと推測される。『最後の審判を生き延びて』はドイツの出版社が版權をもつ文集を底本とするが、政治・社会評論だけではなく、他書にはない文化評論にも紙幅を割いている点から、劉の全体像をつかむに有用な書といえる。『劉曉波と中国民主化のゆくえ』は前二書が劉の論考を軸に編まれているのに比し、第1部に矢吹晋と加藤哲郎との対談を配し、しかもそれが全体の約半分を占めるという点から見ても、書名のとおり劉を語ることを通して今後の中国を論じること主眼が置かれている。対談以外の構成が罪状にあげられた劉の六つの論考と裁判資料に絞られていることが出版意図につながる強烈なメッセージとなっている。『私には敵はいない』の思想』は季刊雑誌『環』44号の特集の単行本化であるが、同41号から三つ、訳し下ろし三つを加えて編まれている。総勢二二人の論者には劉を否定的に捉える者はいないが、劉および劉をめぐる事象を様々な角度から論じており、

劉をある程度には相対化して見る事ができる書といえそう。なお、四書のすべてに（4）は一部引用として「08憲章」が、劉の下獄後（ノーベル賞受賞後）に刊行された三書には劉の最終陳述書「私には敵はいない」が収録されている。また、劉を別にして四書すべてに及川淳子が名を連ねていることを特記しておきたい。

ここで四書に関わる次の「事件」を書きとめておくことも日本（人）が劉をどのように受けとめたかを探るために無意味なことではないように思う。『環』44号の編集後記が「わが国を代表する作家知識人にも依頼したが、メッセージを寄越してきた人は誰一人居なかった」と記したのは作家知識人らが奇しくも同じ反応をしてきたことへの不審であろう。また、二冊の藤原本に執筆している子安邦宣が自身のホームページで岩波本を「日本の出版史上に汚点を残す大きな不正」「劉曉波問題という現実とあまりに不釣り合いな、いい加減な文章」として版元と解説者を批判（この出版は正しいか」<http://homepage1.nifty.com/koyasu/>）

しているが、私には乱暴にすぎると思われる。契約に関わる版元批判については判断しがたいが、「岩波書店と雑誌『世界』はこの劉曉波問題に積極的な関心を示したことは全くない」という批判が岩波を含むマスメディアを批判していることは理解できる。しかし、劉氏を、またノーベル賞受賞をどのように評価するのか、おしなべて解説者の立ち位置は曖昧だとはいえ、何故に『解説』の筆者が中国政府の立場を代弁している」ということになるのか理解できない。この子安批判に対して高井潔司は「子安氏を単純に二分法論者と決め付けるのも公平ではないが、それにしても多様化、多元社会化した中国の現状を踏まえた議論ではないことは大きな欠陥だ」（中国のいまをどう読むか——三つの劉曉波論から <http://news.search.napj.jp/>）とする。その日本思想史に関する論者から多くの刺激を受けている私は、子安が『中国』に発言することは中国の問題を共時的に日本の問題として理解するために多くの示唆を与えてくれるものと思っている。し

かし、現下の中国が一党独裁体制下になり、そのことが主因となって厳しい言論統制下にあることは事実であるが、一党独裁の本身は例えば文化大革命期からは変質していることを見誤ってはいないだろうか。社会主義市場経済、また資本家を党内に囲い込むといったアンビバレントを自ら選択した中国共産党は今や共産主義において一枚岩であるわけではなく、想像を超えて脱イデオロギー化した既得権益集団なのである。

さて、四書を読み通して、08憲章からノーベル平和賞受賞に至る劉曉波をめぐる現象については理解を深めることができた。ただ、劉曉波自身については『現代中国知識人批判』で既に披瀝されていた独立不羈の精神を欠く自己反省のない士大夫意識を引きずる知識人への徹底した批判を再確認し、「私には敵はいない」という言葉に象徴される非暴力主義、抵抗の精神を確立したということになる。人権と民主主義、自由、個人主義、市民社会などへの無邪気とも思える賛美に対しては、貧しき世界を足下にして成り

立ってきた欧米中心的な価値観に拝跪するものではないかと思う。しかし、これは中国知識人批判のためのレトリックではないか。マルクス主義への全否定に対しては、歴史を後知恵的に論じているだけではないかと思う。しかし、これは「マルクス主義であれ、あるいは他の何主義であれ、いかなる時期においても絶対的に信仰するのは、盲目愚昧の現れ」（③資料③「地獄の入口で」と語るとき、中国近現代史批判のためのレトリックではないか。

四書に取り上げられている劉の論考はいずれも断片的ものである。要するに編集されたものである。それを必死に深読みして劉の思想にたどり着こうとしても、行く着く先はそれぞれの書の企図ではないように思えた。

「魯迅は中国人、および自分自身に絶望したあと、超越的な参照系を見いだせず、自分が徹底的に唾棄した現実の中に再びもどった」（②「現代中国知識人批判」あとがき）という劉は、「時事評論を書かなければならないのです。これは僕の

責務です。もう昔には戻らない」(4)「天安門の母たち」と劉曉波「中の劉の言葉」と、客員研究者として滞在中だった米国から渦中の天安門広場へ飛び込み、その後の度重なる投獄、執拗な監視体制下にあつて屈することなく、中国にとどまり、一年の懲役刑に晒されているのである。してみると、劉自身が劉の思想を探ろうとすることに意味はないと言っているのではないか。思索の世界にこもることなく、現実立ち向かい、もって生じる現象に注目せよと訴えることに劉の本義があるように思える。少なくとも私たちはそのように思うべきではないか。

「命を顧みず非暴力主義を実行した偉大な人間」(2)「愛国主義の好戦化とゴロツキ化」としてガンジーとキング牧師を範とする劉は、八九年の天安門広場における数日を除き、二人とは異なつて「民間」にあることを禁じられ、組織者として活動することはできなかった。にもかかわらず、劉が中国の民主化運動に影響力を及ぼしつづけているのは何故か。劉の思想とは、劉をめぐる現象にこそ体现

されているものだと言わねばならない。現象を生じさせている根本に中国共産党があり、劉をめぐる現象とは劉がその共産党と対峙することから逃げないという劉の意志の表出なのだ。劉の非暴力は、文化大革命は言うに及ばず、抗日戦争、国共内戦、建国……中国革命の全過程における全暴力を全否定するが故に、国家Ⅱ党権力の根幹を揺るがす思想となつているのだと思う。

ノーベル平和賞は、過去の受賞者に佐藤栄作がいたり、最近ではオバマ大統領がいたり、その選定は真に政治的なものであり、受賞への「祝福」も政治的にならざるを得ない。劉の本質はノーベル賞受賞とは関係ないという意味で、私は、受賞そのものよりは受賞の結果を祝福したい。中国政府Ⅱ党が受賞に過剰に反応し、本人はおろか七五年ぶりに代理する受取人もいないという状況が生み出されたことに、言論活動を理由に懲役一年という判決によつて捕らわれの身となつた理不尽さが、あまねく世界に知れわたつたことにノーベル平和賞が貢献し

たことを、劉曉波と彼を支える人々とともに喜びたいと思う。日本で陸続と劉曉波に関する書が刊行されたことも受賞があつたからこそであらう。

「生産手段の私的所有の廃絶も、資本主義・市場経済への対抗も、医療や教育が誰にでも供給される平等主義と福祉も、もちろん労働者階級が職場の主人公として現場を自主管理することも、とつてなくなつていく」「格差が激しい」という『量的差異』が問題なのではなくて、『格差の背景』の問題、すなわち『階級の問題』……『支配する階級』と、『膨大な被支配階級』に分裂してしまつたことが問題の核心」(3)対談での矢吹発言という状況にあつて、劉曉波の思いを実現するために越えねばならないハードルは高いが、三書が収録する劉の最終陳述書「私には敵はいない」中の「いかなる力も自由に向かう人間の欲求を阻むことはできない」という楽観論に希望をつなぎ本稿の結びとしたい。

——六月四日未明に記す。

(文中敬称略 あさ・ひろゆき 編集者)